

## 〈研究会報告〉

## イスラームをどう教えるか

塚原直人\*

## 1. はじめに

現在の高等学校世界史において、イスラームがどのように教えられているか。現行の昭和53年度版学習指導要領では、その内容の構成において「文化圏学習」を基礎に置いているが、その中で、イスラームは、西アジア文化圏として、中国を中心とした東アジア文化圏と、ヨーロッパ文化圏とともに掲げられている。したがって、構成上は、三者とも対等な扱いとなっており、イスラームは、東アジアやヨーロッパと同様の重要度で指導されるはずである。では一方、学校現場で用いられている教科書ではどうであろうか。教科書の章立てのような構成上はともかく、その中に含まれている情報量においては、他の2文化圏とは大きな格差がみられる（表を参照）。このような大きな情報量の差は、ただでさえ身近に感じられるとはいいがたいイスラームをさらに「疎遠」なものとする原因となるのではないかとと思われる。

## 2. 「視点」の問題

高校世界史において、「ヨーロッパ史偏重」はよく問われる問題である。このいわゆる「ヨーロッパ中心史観」は、必ずしも配当ページ数や時間数の偏りについてばかり言うのではない。それ以上に重要なのは、「歴史用語」自体に、ヨーロッパからの視点が入り込んでいるのではないかということであり、さらに問題なのは、このことに多くの人が気づかずに見落としている点である。例えば、「十字軍運動」について見ると、ヨーロッパの側から「十字軍」を見れば、聖地エルサレムを奪回するために派遣された軍隊であり、それは善のイメージで見られる。しかし、逆にイスラームの側からこれを見た場合、「十字軍」は、混乱のなかの一つの政治勢力に過ぎなかった。「十字軍」は突然に攻めてきた、しかも、虐殺の限りをつくした。したがって、イスラームにしてみれば、悪のイメージしかないのである。では、日本ではどうだろうか。多くの場合、イスラームから見た「十字軍」についてのイメージは触れられない。ヨーロッパから見た視点とイスラームから見た視点という両面の見方があるにもかかわらず、それに気づかずに一面的・一方的な見方を知らず知らずのうちにしているのである。同様なことは、アラブの民族運動についてもいえるのである。

\*東京都立秋川高等学校

### 3. おわりに

これまで見てきたように、高校世界史において、イスラームを教える場合に重要なのは、一つに、ヨーロッパや中国と同等の情報量を確保することである。しかし、情報が増加しても、それが政治史や王朝変遷史に終始しては、何にもならないのであり、よりイスラームの社会や文化の側面を重視したものでなければならない。また、二つめには、従来のような、ヨーロッパから見た視点ばかりではなく、よりイスラームからの視点を取り入れたものしなければならない。

イスラームは、我々日本人にとってまだまだ疎遠な地域である。したがって、そのような地域を指導する場合、より生徒が接触しやすい形で行う必要がある。例えば、音楽を媒介としたり、イスラームの生活・文化を切り口としたものが考えられる。また、世界史といった枠の中だけでなく、自然、乾燥地域、石油資源といった「地理」学習における西アジアとの関連を重視した授業も、「社会科」としてのまとまりを考えるうえで、必要なのではないだろうか。

表 各教科書における「三大文化圏」の取り扱い

	「山川」	「実教」	「東書」	「清水」
三文化圏のページ数	140 (100.0%)	121 (100.0%)	115 (100.0%)	92 (100.0%)
東アジア文化圏	46 (32.9%)	44 (36.6%)	36 (31.3%)	30 (32.6%)
西アジア文化圏	24 (17.1%)	26 (21.4%)	16 (16.9%)	20 (21.7%)
ヨーロッパ文化圏	70 (50.0%)	51 (42.0%)	63 (54.3%)	42 (45.7%)
本文の総ページ数	343	346	321	240
三文化圏のページ数	51 (100.0%)	38 (100.0%)	47 (100.0%)	55 (100.0%)
東アジア文化圏	16 (31.3%)	15 (39.5%)	13 (27.7%)	20 (36.6%)
西アジア文化圏	11 (21.7%)	10 (26.3%)	9 (19.1%)	11 (20.0%)
ヨーロッパ文化圏	24 (47.7%)	13 (34.2%)	25 (53.2%)	24 (43.6%)
総配当時間	120	111	125	140

※「山川」：山川出版社『詳説世界史』

「実教」：実教出版『高校世界史』

「東書」：東京書籍『世界史』

「清水」：清水書院『高等学校世界史』

※配当時間は、各教科書のいわゆる「教師用指導書」に従った。

(文責 MC内田)